

発達障害者の食の問題に関する調査・研究

自閉症スペクトラム症での食の問題の実態調査と味知覚の特徴が食行動にどのような影響を与えるか調べています

味知覚と食行動の関連を明らかにすることで特性に合わせた食べやすい食事を実現する

食をめぐる様々な問題

自閉症スペクトラム症（ASD）があるお子さんでは、偏食などの様々な食の問題が生じることが知られています（田部・高橋, 2015等）。嫌いな食べ物を無理強いするのは望ましくない一方で、過度な偏食は低成長・生活習慣病を誘発し、様々な医療・社会的な問題につながると考えられます。しかし、ASDの方での味覚の問題は、他の感覚に比べて実態・メカニズムともにわかっていることが少ないため、本研究では、自閉傾向に関連した食行動の特徴を実態調査するとともに、味を感じる際の「味知覚」の特徴が食行動に与える影響を研究しています。



研究1：自閉傾向に関連した食行動の特徴

自閉傾向に関連した食行動についてアンケート調査を行いました。その結果、自閉傾向が高い人では、味の混ざりへの忌避と苦手な食感があるという特徴がわかりました。さらに酸味が苦手な人は全体的に食の苦手が多いことがわかりました。

自閉傾向と関連が深い食行動：

<味の混ざりへの忌避>

- 味が混ざるのが嫌なので、おかずをすべて食べてから、ご飯に移る食べ方をしてしまう（あるいはその逆など）
- みたらし団子、エビチリソースのように、甘じょっぱい、甘酸っぱい、といった混ざった味が苦手である

<食感の問題>

- 食べ物を食べている時に、食感が気になって嫌な気持ちになる事がある
- フニャツとした感触やザラザラした感触など、特定の苦手な食感がある

<苦手な味>

- 酸っぱい味や旨味（調味料）のように、特定の苦手な味がある
- 濃い味つけのものは苦手である

<体の感覚（内受容感覚）>

- 喉が渇くとか、お腹がすくという感覚がよくわからない
- 水分が欲しくなり、四六時中ガバガバと水を飲んでるような気がする

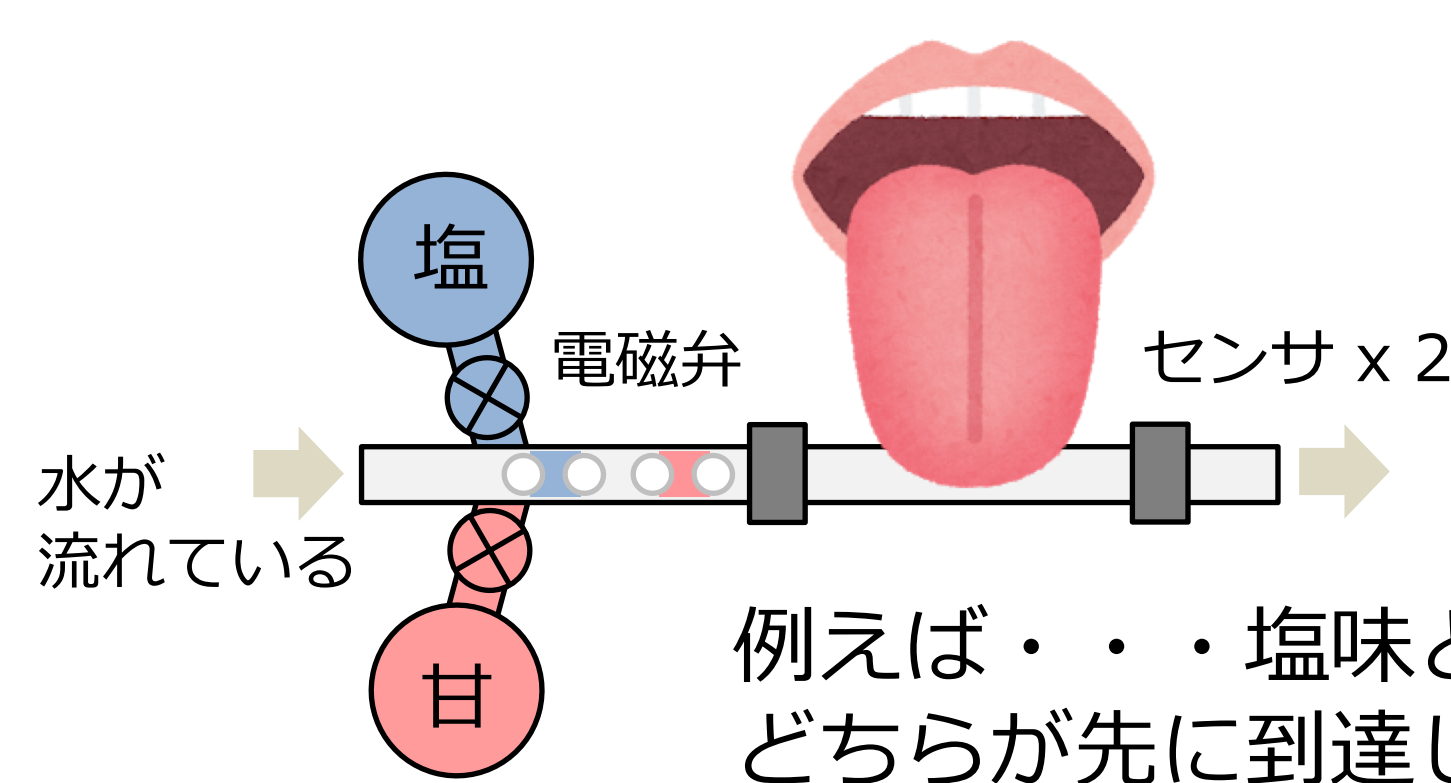
<食行動の偏り>

- 毎日同じものを続けて食べることが多い
- 苦手なものが多く、食べられるものが限られている



Chen, Watanabe, Kobayakawa, Wada, 2022 *European Eating Disorders Review*

研究2：味知覚の特徴と食行動に与える影響



味覚がどのように生じているかを調べその個人差と食行動の関係を明らかにする。

和田・高野・小早川（2021）生理学会

(*) 脳神経科学研究室（高野弘二 研究員）・産業技術総合研究所（小早川達 上級主任研究員）との共同研究



参加者募集に関する連絡先
→ dds_exp@rehab.go.jp
(左のQRコードからもお問い合わせいただけます)

和田 真（脳機能系障害研究部・発達障害研究室長）
wada-makoto@rehab.go.jp
陳 娜（脳機能系障害研究部・流動研究員）
chen-na@rehab.go.jp